基礎老化研究 43 (3) ; 47, 2019

【学生奨励賞受賞者寄稿】

第 42 回日本基礎老化学会大会　学生奨励賞を受賞して

久松　大介
慶應義塾大学医学部 生理学教室
博士後期課程 4 年

この度は、第 42 回大会の学生奨励賞に選出していただき、非常に嬉しく思います。まず、この場を借りて大会長である石神先生をはじめ、事務局の方々にお礼を申し上げます。

私が本学会会員とならせていただいたのは 2 年ほど前であり、2017 年にスイスで行われた Aging, Biology of Gordon Research Conference で国立長寿医療研究センターの丸山光生先生先生にお会いしたことがきっかけです。ひとりで参加した初の国際学会で不安もありましたが、丸山先生とは研究のみならず色々な話をさせていただき、多くのことを学ぶ非常に良い機会となりました。帰国後も日本基礎老化学会主催のシンポジウムや学会参加の際には、丸山先生をはじめ、本学会の多くの先生方には大変お世話になり、非常に感謝しております。

そもそも私が老化研究を志すようになったのは、高校時代に“なぜ人は老化するのか？老化を止めることはできないのか？”と漠然と考えており、これがきっかけです。それから 10 年以上が経ち、日本をはじめ世界で老化研究が盛んに行われる中で、いま老化研究に従事できていることは幸福なことだと思います。それはひとえに、現在第一線でご活躍されている先生方のおかげです。しかしながら、本学会や様々な学会参加を通して、やはりがんや幹細胞研究の分野に比べて、純粋な老化研究を行なっている学生、あるいは若手のポスドクは少ないのではないかと感じました。老化研究は実験系の長さから、一から行おうとすると非常に研究期間を要するものであり、しっかりと老化研究ができる環境が整っていなければ、学生が研究を行うのは難しいのではないかと感じます。しかし、超高齢化社会を迎えた日本において、いまの学生が老化という現象に真剣に向き合うことが大事ではないかと私は思います。

近年、多能性幹細胞や人工知能などの最先端の研究を医療や創薬に応用する取り組みが盛んに行われるようになり、科学は世間の身近なものになりつつあります。同時に、科学に対する社会の期待は大きくなっており、以前よりも研究者は研究成果を社会に還元することを強く求められるようになったと感じます。一方で、このような背景から成果を求めるあまり科学的好奇心を失いがちになってしまう可能性も感じます。私は卒業後もアカデミアで研究に従事したいと考えているので、研究者を志すきっかけとなった根源的な疑問を忘れずに、研究成果を社会に還元できるような研究者になれるよう、本受賞を励みにし、日々の研究に向き合っていきたいと思います。

最後に、本研究に際し直接ご指導をいただいた現滋賀医科大学 金田勇人先生、東京医科歯科大学 馬渕洋先生、ならびに指導教官である慶應義塾大学医学部 岡野栄之教授をはじめ、研究室の皆様に感謝を申し上げます。